

第2部 トークショー／講演

「インターネットが授けてくれた10の大切なこと」

古新 舜 (コスモボックス株式会社代表取締役社長 CEO、映画監督)

【古新】

皆様、本日はお足元の悪い中こちらまでお越しいただきましてありがとうございます。映画監督の古新舜と申します。本日はこのような貴重な機会をいただき、私自身もとても楽しみと言いますワクワクしております。

私は現在、自分の会社を経営しながら映画監督として活動しております。実は、私にとって初長編作品となる映画「ノー・ヴォイス」(<http://no-voice.com>)が、来月(2013(平成25)年11月)劇場公開されることになっております。ですので、まだまだ駆け出しの映画監督でございます。そんな私が、映画監督になって10年目にして長編作品の劇場公開に至ることになったのですが、そのきっかけが実は19歳から22・23歳の頃のインターネットとの出会いでした。この自分自身の10年を振り返りながら、インターネットを通じて私がどのような体験をしたのか、どんなことがあったかということを皆様にお伝えできればと考えております。先ほどのシンポジウムの中でパネリストの皆様がおっしゃられていたのは、LINE(ライン)のことやセキュリティの問題といったように、インターネットのネガティブなところが多かったのですが、この講演への登壇依頼をいただいた際に、御依頼主(人権教育啓発推進センター)からは、インターネットのポジティブな側面について話をしてほしいということでしたので、ポジティブな側面を皆様にお伝えしたいと思っております。

私のプロフィールについては、皆様のお手元のプログラムに書いてあるかと思いますが、私は正にデジタル世代と言えるかと思います。1981(昭和56)年生まれでございまして、ちょうど2000(平成12)年が二十歳でございました。私のレジュメの中にも一つのキーワードとして書かせていただいておりますが、私が二十歳になった頃にインターネットと出会ったことによって、私は自分の人生を救われたという経験をいたしました。インターネットに人生を救われたなんて、そんな仰々しいことがあるのかと思われる方も多いと思いますが、デジタル世代からするとインターネットというものは切っても切れない関係、それが正に私の世代であると考えております。

そして、二十代では不思議な巡り合わせから映画の業界に入りまして、映画のジャンルで言いますと短編映画を学ぶことになりました。この短編映画というものは皆さんにはなかなか認知していただきづらい分野ではあるのですが、ジョージ・ルーカス監督¹といった人たちも必ず通っている短い尺の映画を作るといようなジャンルを、二十歳代ではやらせていただきました。

そのような中で様々な映画祭に参加して賞をいただきながら、短編映画や地域に密着した映画、そしてそういう所での人々との交流を通じて、地域の方々が暖かさに触れるといったことを経験してきました。そして昨年(2012(平成24)年)は、海外の映画祭でも賞をいただきまして、今年(2013(平成25)年)は晴れて劇場公開の栄冠を勝ち取ることとなりました。

また東日本大震災(2011(平成23)年)直後は、これも不思議な御縁から、福島県の相馬市と南相馬市を訪問し、相馬野馬追²という平将門の時代から1000年以上続く行事を撮影させていただいて映像化し、無償のDVDの配布活動に携わらせていただきました。この要素においても映像や、あとはソーシャ



古新舜さん

1 アメリカの映画監督、映画プロデューサー、脚本家。代表作として「スターウォーズ」シリーズや「インディ・ジョーンズ」シリーズなどがある。

2 そうまのまおい：福島県浜通り北部(旧相馬氏領。藩政下では中村藩)で行われる、馬を追う神事及び祭りで、神事については国の重要無形民俗文化財に指定されている。

ルメディア³やインターネットがもたせてくれた出会いというのが、不思議な御縁でつながっているなということで、お話をさせていただきたいと思います。

それでは、ここで私がこれまでどのような映像を作ってきたのかということについて紹介させていただきます。私は映像屋でございますので、やはり映像で皆さんに御覧いただいた方が早いと思いますので、自己紹介代わりに、私が会社を立ち上げてから6年間の作品をまとめたデモリール⁴を、今日は3分のものを持ってきましたので、御覧いただきたいと思います。

<デモリール映像上映>

御覧いただきましてありがとうございます。私は、大学時代は物理を専攻していたのですが、不思議な御縁から映画の業界に入って、自身の会社を立ち上げて、そして短編映画を通じて学んだことをどういうふう to 社会につなげていくかということで、現在は企業様のブランドをはじめ、商品PRのためのショートフィルム化といったところで会社の事業の一つの柱として考えておまして、それと並行して映画を作っております。

今回の講演の御依頼を受けた際、インターネットのプラスの面、ポジティブな側面について話をしたいと言われましたので、どのようなことが良いのかと自分なりに考えました。そのような依頼は初めての経験だったのですが、様々な観点から改めて考えてみて、10個のちょっといいことを挙げてみようかなと思いました。インターネットからの10の授かりものということで、こんなふうにちょっとラインナップを挙げてみました。

* インターネットからの授かり物10 *

- 1：素直な気持ちを伝えられた
- 2：世代や場所を越えた仲間を見つけられた
- 3：自分のことを知ってもらえた
- 4：学校では教わらない知識を学べた
- 5：インターネットでしか出来ない出会いと別れ
- 6：小さい頃からやりたかった夢の気付き
- 7：他者を知ること、自分を知ること
- 8：学校で見つけられなかった仕事の選択
- 9：踏み出す勇気
- 10：コミュニケーションの可能性

先ほども申し上げました通り、私は大学生時代に物理を専攻していました。ちなみに、大学2年生の時の担任は、プラズマやUFOでおなじみの大槻義彦教授でした。そして、大学で物理を勉強しながら、4年生の時にはカウンセラーを目指して心理学を勉強していました。そのカウンセラーを目指すきっかけになったのも、インターネットが授けてくれた御縁でした。

私は、実は幼少期から結構いじめられていて、クラスの学校の子とはなじみませんでした。学校の先生にもなじむことができませんでした。そして、一番大きかったのは両親です。今となってはもうこの年ですので、両親に対しては感謝の気持ちが絶えません。ただやはり小さい頃の自分の気持ちを

3 Social Media: インターネット上で展開される情報メディアのあり方で、個人による情報発信や個人間のコミュニケーション、人の結びつきを利用した情報流通などといった社会的な要素を含んだメディアのこと。利用者の発信した情報や利用者間のつながりによってコンテンツを作り出す要素を持った Web サイトやネットサービスなどを総称する用語で、古くは電子掲示板 (BBS) やブログから、最近では Wiki や SNS、ミニブログ、ソーシャルブックマーク、ポッドキャスト、動画共有サイト、動画配信サービス、ショッピングサイトの購入者評価欄などが含まれる。

4 過去の映像作品をダイジェスト風にまとめたもの。

振り返ってみると、かなり両親とズレがあったなと思います。どうしてこう親子というのは気持ちのすれ違いがあるのだろう、ということにずっと悩んでいました。このように、学校にもなじめない、家庭でも両親となじめないということで、自分がダメなのかな、生きていてはダメなのかな、という気持ちを持っていたのが、幼稚園から大学生の頃までずっと続いていました。

私は、大学を受験した時、第一志望が不合格でした。第一志望に落ちて、第二志望、第三志望には受かって、その学校に入学しました。しかし、「第一志望校に落ちた」＝「自分の人生はもうだめだ、失敗だ、落第だ」みたいな考え方していたのが19歳の頃でした。当時の自分にとって大学受験は1つの大きな目標で、幼少期からの両親の強い希望として大学は第一志望に受かってほしいというのがあったんですね。しかし、それに「失敗してしまった」＝「自分はダメなんだ」という思いに打ちひしがれていた時に、インターネットに出会って、そこでの人々との交流の中で自分自身の考え方が大きく変わりました。そういう私にとってのインターネットに対する感謝という部分について、今日はお伝えできればと考えています。本当にインターネットが自分の人生を救ってくれたと、今でも強く思っています。

それでは、今日お話す10の項目のうちの1つ目の「素直な気持ちを伝えられた」についてお話させていただきます。当時、大学生だった私は、いわゆる引き籠もりだったのですが、その時に遊んでいたのはインターネット上のチャットでした。チャット⁵というのは日本語に直訳すると“おしゃべり”とか“雑談”という意味になるのですが、当時（2000（平成12）年）は、まだインターネットの回線速度がさほど早い時代ではありませんでした。ISDN⁶からADSL⁷に変わり、電話の固定回線によるものからインターネットの専用の回線が増え始めた頃で、テレホーダイ⁸なんていうサービスもありました。

当時、僕は第一志望の大学に落ちて、「もう人生終わった」なんて思いを抱えつつ、一方で小さい頃から何かを外に発信したい、外に出たいという気持ちを強く持っていました。うちの父親は岩手県の釜石市の出身で、堅実かつ真面目な人です。そんな親に私は、長男だということもあり、過保護に育てられたと思います。堅実な考え方の親がいるために、私自身は、新しい発想を持っていたても、どうしてもそれを押し殺さなければならず、いい子でなければいけないと思い続けていたのが、18歳まででした。

そして大学受験に失敗し、どこかに自分の思いを吐き出せる場所がなければ息苦しい、いじめられている自分はダメなんじゃないかと思っていた時に、インターネットに、チャットに出会ったんですね。その当時は、先ほどもお話ししました通り、インターネット回線速度はまだ早くなかったですので、今のTwitter（ツイッター）やFacebook（フェイスブック）などは全然できない時代ですね。そんな時に、当時としては珍しかったかわいらしいアイコンが付いているチャットを見つけたんですね。その時はまだ文字だけしか入力できないチャットがほとんどでした。昔からこういうかわいらしいデザインが好きでした。こういうチャットを見付けて、24時間チャットに入り浸っていたのが19歳の頃でした。

当時は、第2志望だった早稲田大学に入ったのですが、授業にはほとんど出ておらず、インターネットの“教室”に24時間入り浸っていたというのがその頃の思い出です。

幼少期からずっと、私には自分の“個”というものが強くあって、学校の空間や家庭の空間というものにどうしてもなじむことができないでいました。もちろん学校や家庭になじむということも大事なのですが、私の場合はいかんせんなじめなかった。例えば、小学1年生の時に算数が得意でしたので「5年生の算数の勉強をさせてくれ」と親や先生に頼んでも、「いや、お前は1年生なんだから1年生

5 Chat：インターネットなどのコンピュータネットワーク上のデータ通信回線を利用してリアルタイムにコミュニケーションを取ることができる手法。

6 Integrated Services Digital Network の略：電話やFAX、データ通信を統合して扱うデジタル通信網のこと。通常、電話回線を介して提供されるサービス。

7 Asymmetric Digital Subscriber Line の略：電話線を使い高速なデータ通信を行う技術。音声通話では使われていない高い周波数を使用してインターネットに接続する。ISDNと比較して通信速度が速い。

8 固定料金を支払うことにより、23時から翌日の8時までの間、あらかじめ登録した2つの電話番号まで接続し放題になる定額システム。

らしくしなさい」といったように、自分がやりたいと思う発想を受け入れてくれる環境が家庭にも学校にもなかったというのが、小さい頃の思い出ではあります。しかし、インターネット上では、自分がやりたいことができなかった、受け入れてもらえなかった既存の環境にいたくてもいいわけであって、自分の個というものを受け入れてもらうことができるのですね。自分にとっての居心地のいい環境が、インターネットの中にはあった。これはチャットでも同様ですね。ある特定の話題をするチャットであれば、その話題は苦手だなと思ったら退席して構わないわけであって、自分が好きだなと話題のチャットやホームページに集まって交流することもできる。これは、それまでの18年間の人生の中では全くなかった経験で、真逆の環境だったのですね。それで、インターネットにハマってしまった。

また私はちょっと癖がある人間でして、幼少期から本当にテレビっ子でした。両親が夜遅くまで仕事をしていたこともあり、おばあちゃん子でずっと家でおばあちゃんとテレビを見ていたんですね。それで、幼稚園や小学校の頃に見ていたのは、月9と言われるドラマであったりとかバラエティー番組でした。そんな余り子どもが好まないような番組ばかり見ていたので、周りの子たちに「こういうバラエティーが面白いよ」とか、「こういう 트렌ディードラマ見てる」なんて話しても、みんなの顔は「？」が付くんですね。当時の私の話ってというのが、ほかの子たちとはちょっと変わった視点だったんだなと思います。ほかに、当時考えていたことを例に挙げても、例えば「こういうお話を作ったんだよ。みんなで劇やろうぜ」と言っても、周りからは「ちょっと複雑すぎて分からないよ」という反応をされていたので、自分でも考えていることや見ている視点が、ほかの子たちとはちょっとズレているのかなと思っていました。

でもインターネットのチャットをするようになって気付いたのが、世代を超えて話ができることでした。皆さんも子どもの頃や若い頃に、こういうドラマやバラエティーをよく見ていたなとか、っていうのはあると思います。例えば80年代の 트렌ディードラマやバラエティーの話をしようとしても、同世代はリアルタイムで見えていなくていまいち話が通じなくても、ちょっと歳が上の先輩や私の親の世代だとももちろん見ているわけなんですね。あの番組が面白かった、こういう番組といった話をすると、「ああ、俺も見ていたよ」というように話し合えると、私はすごくうれしくなりました。同世代とは合わなかった話が、チャットだと話が盛り上がる。ようやくしゃべれる相手が見付かった、と感じたのが19歳の時でした。

そしてやはりうれしかったことは、私に問い掛けてくれることですよね。先ほどお話ししたチャットに入ると、そこにいる人たちは皆優しく、こんにちとはとか、名前はなんなのとか、どこからアクセスしているのっていうふうに問い掛けてくれる。学校の中だと、もう既に名前が分かっている、どういう属性の人が教室に集まっているかっていうのも分かっているような状況ですので、そういう当たり前の質問を問い掛けてくれるという環境がないですね。家なんかでも同様です。私自身が父親から言われていたことは、大学には入れとか、勉強がとても大事なんだっていうようなことがほとんどで、私がドラマやお笑いが好きなんだというような話は一切したことがありませんでした。母親もかなり厳しい人でしたので、幼稚園から塾に通わされていましたので、僕は家族と本音で話したっていうのは、実は今この歳になってもありません。そんな自分が本音でしゃべることができる唯一の場所がチャットだったなと思っています。チャットの中で話をしている時にうれしかったのは、いろいろなことを尋ねてくれることですね。親なんかは「仲間というのはこういうものだ」みたいなことを言うのですが、チャットの中の人たちは、まず私の話を聞いてくれて、そのことによって自分自身のことを話すきっかけを与えてもらえた。これは相手の顔が見えないチャットだからこそ、と言えるかもしれません。先ほども学校とか家とかでいうとやっぱりフェイス・トゥ・フェイスで見えてしまう。もちろん家や学校などでのフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションは大事なのですが、顔が見えないコミュニケーションの良い意味での特性というのものもあるのではないかなと感じています。チャットの中で、いろいろな人たちが問い掛けてくれる何気ない言葉がとてもうれしかったです。

それから、私は大学で物理学科に入ったのですが、私はちょっとひねくれ者でして、実は物理は受験科目の中では一番苦手でした。でも私自身、物理という教科がどうしてこんなに苦手なのかが分か

らず、それで物理の先生になってみようかということで、物理学科に入ったという経緯があります。

ホームページというのは、英数字や記号の組み合わせのソース⁹で構成されているということを、大学のパソコンルームで知りました。でも、こういうことは、学校の授業の中では教えてくれませんでした。ソース（コード）は、見た目は何だか英語の文章のようですが、英語とはまた全然違うんだなといった、驚きがありました。インターネット、ホームページというのは、表面上はこんなふうに見えていますが、実は裏では全部こういうような言葉（ソースコード）で書かれている。私たちが使っているメールなども同じようなソースで構成されていて、暗号化されている。私自身、小さい頃からこういう世界に興味はありましたが、19歳になって初めて知ったんですね。大学のパソコンルームで、ああもっと早く知りたかったなと感じていました。

さて、私がインターネットの世界にハマっていく背景には、不思議な御縁がありました。「第一志望の大学に入れなかった」＝「目標がなくなってしまった」という状態でしたので、19歳の私は、インターネットの世界で自分探しをしていたのです。チャットの中では、例えば大工さんや、女子高生、女子大生、ニート¹⁰といったように、本当に様々な属性の方々と出会うことができました。私自身が進学校に通っていたというのもあると思いますが、目指すはなんとか大学とかお医者さんだというような、かなり目標が限定された世界の中にいたこともあり、小さい頃はテレビっ子で俳優になりたいとか物書きになりたいといった気持ちがあったにも関わらず、知らず知らずの内に十数年に渡ってその感情を押し殺してきたのだと思います。

そのインターネットの、チャットの友人たちは、先ほどもお話しした通り、私にいろいろなことを尋ねてきてくれたんですね。どんな夢があるの、何がしたいの、どんなことが好きなの、と。これは、それまでの18年間、私にとって経験のなかったことでした。今の私のように30歳を超えたいい大人になると、当時自分が置かれていたのは、普通とは違う特徴的な環境だったんだな、ちょっと一般的じゃなかったのかな、と振り返ることができるのですが、正に今受験勉強を一生懸命やっておられる学生の皆さんの中には、当時の私と同じような方もいらっしゃるのではないかと思います。

その当時、ネット上での私にとっての重要な出会いが、「テリーズワンダーチャット」というテリーさんという方が管理されているチャットでした。そのチャットはかなり人気のあるサイトでした。YAHOO！などの人気ランキングで十何位に入るようなサイトで、そこに私は24時間入り浸って、楽しくやっていました。チャットに一日中いたので、あいつはいつもここにいるメンバーだなということで、常連としてかなり認知されるようになりました。その中で、このテリーチャットを作っている管理人のテリーさんはすごい人なんだよっていう噂が出てくるんですね。そう言われてみると、僕が入り浸っているチャットはそもそも作っている人がいて、もともと存在していたわけではない。このテリーさんっていう人はどんな人なの？とチャットの中の人たちに聞いてみると、自分が通っている大学の政治経済学部の1学年上の先輩だということが分かったんですね。チャットにこのかわいらしいポストペットをあしらって、しかも大勢の人たちがアクセスするようなサイトを作った人って、とても頭が良くてすごい人なんだろうな、と自分の中の憧れの人が管理人のテリーさんでした。

そのような感じで私はチャットで遊んでいて半年ほど経った2000（平成12）年の10月か11月頃、ちょっとした事件が起きました。どんな事件かといいますと、いろいろな掲示板で私のハンドルネームのことが書かれていて、中傷されていたんですね。私が小学校の頃から中学・高校といじめられてきたので、本当にいじめられっ子のある意味代表格みたいなものなのですが、いじめに関しては慣れていたわけですね。揶揄されるとか、ワイシャツが汚されるとか、物が隠されるなんて言うのはずっとやられて来たので、いじめられることってこんなものだよな、というふうに感じていました。でもインター

9 = ソースコード：プログラミング言語を用いて作ったコンピュータプログラム。ソフトウェアの元となる一連の文字の羅列。

10 NEET = Not in Education, Employment or Training: 日本では、厚生労働省『特定調査票集計』の中の「詳細集計」（総務省労働力調査）に基づいており、そのうち、15～34歳の非労働力人口の中から学生と専業主婦を除き、求職活動に至っていない者と定義している。

ネットの世界は、自分にとって居心地の良い場所なのでいじめられることはないだろうなと思っていたら、いろいろな掲示板で私のハンドルネームが書き込まれていた、荒らされていたわけです。その時にチャットにいつものように遊びに行くと、「おい、お前の名前がいろんな掲示板で書かれているよ。これいじめじゃないか」とか、「お前、誰かに狙われているんじゃないか」と、チャット仲間が聞いてくるんで、びっくりしたんですね。ずっと学校でいじめられ続けてきて、ようやく自分の世界ができたのに、インターネットの世界でもいじめられるようになってしまったかということで、その時はかなり苦しみました。ところが、それは女の子からの書き込みで、しかもその中に携帯電話の番号が書かれていたんです。今の感覚だとちょっと怪しいなという感じもしなくはないのですが、チャット仲間が言うには、その書き込みは女の子の苦痛のメッセージで、お前のこといじめているんじゃないくて、どうしてもこの電話番号に掛けてほしいみたいだから、ちょっと電話を掛けてやれよ、と言うんですね。

本当かなと思いながらも、半信半疑でその番号に電話を掛けると、女の子が泣いていたんです。その子は、愛知県に住んでいて、管理人のテリーさんのお友達だと言うんですね。そして、テリーさんが昨夜事故で亡くなられた、御家族からお通夜のお知らせを受けて、あなたに連絡が取りたくていろいろな掲示板に書き込みをしたということでした。東京の高田馬場にあるビルの5階から落ちて亡くなったということだったのです。それを受けてその女の子は急遽誰か東京の仲間を呼び出さないといけないということで、私がテリーさんの後輩だということを風の噂で聞いて、それで私に直接連絡を取ろうとしたそうなんです。私もそれを聞いて非常に驚きました。テリーさんという方は、バイトなどでかなりお忙しい方だったので、家に帰ってくる時間はいつも深夜の2時や3時なんですね。ですので、テリーさん御本人は、皆がやり取りしている時間帯にはチャット上には現れないのですが、掲示板に書き込まれた女の子たちのメッセージや、このサイトかわいいですねといった小中学生からの書き込みをに対して、テリーさんは深夜の3時や4時といった時間帯に、きちんと返事を書き込んでくれるんですね。なんて優しい人なんだと思っていたら、亡くなってしまったというのです。

実はテリーさんが亡くなる5日前、私とテリーさんは、メッセンジャー¹¹というものでやり取りしました。いつものように、私がネット上で深夜2時・3時頃に遊んでいると、伝説の管理人のテリーさんが、メッセンジャーの中に現れて、「僕は君のことをよく知っているよ。僕はチャットには現れないけれども、毎晩家に帰ってきてから君の書き込みを見ているんだよ」「君は大学の1歳下の後輩なんだね」といったことを、全部チェックされていたんですね。ああ、この管理人さんすごいな、全然チャットには遊びに来れないのに、自分チャットを訪れる常連たちのことをちゃんと分かっている。暖かい人がいるものだな、と感じました。

興奮しながらメッセンジャーを通じて会話をしていると、テリーさんは同じ大学の一歳年上の先輩ということもあり、近いうちに大隈講堂で直接会って食事を御馳走してあげるよと約束してくれたんですね。一週間後に御飯を御馳走してくれると。私は小中高とずっといじめられていて社交的ではなかったので、仲のよい先輩もできませんでした。私とテリーさんは、大学の学部は理工学部と政治経済学部で全く違うんですけども、チャットを通じて、一歳年上の学年の先輩、しかも自分自身が憧れるような頭とデザインのセンスを持っている人と知り合うことができ、僕の心の師としていろいろなことを教わりたいなと思っていたのが、亡くなる5日前のことでした。

そんなやり取りがあった僅か5日後に、愛知の女の子から事故で亡くなってしまったと聞かされました。テリーさんが亡くなられた原因については、過労による事故なのか、自殺なのか、詳細なお話を御家族にお聞きすることができなかったので分かりません。でも、僕は、恐らく事故なんだろうな、と考えています。なぜかと言いますと、私がテリーさんの亡くなる2日後に会う約束をしていたからなんですね。テリーさんのお通夜に、喪服を着て埼玉の大宮の方に行ったのを覚えています。

不思議な感覚でした。2日後に「初めまして」をしようとしていた人のお通夜に喪服を着ている自分…。

11 = インスタント・メッセンジャー：インターネットを介して、チャットや複数人又は個人間でのメッセージのやり取りを行うためのアプリケーション。

お通夜の会場に着くと、テリーさんの遺影があって、そこには若々しくてイケメンな男性の姿があるんですね。インターネット上でテリーさんが亡くなったという話をいろいろと聞いているけれども、もしかして亡くなってないのではないかと思います。やはりその遺影を見ると悲しみが込み上げてきました。最後お見送りのところで、棺の蓋を開けて皆さんとお別れする際に、そこで「初めまして」と伝えました。私を救ってくれたチャットのサイトを作ってくれた管理人さんと、もう少しで直接お会いできるはずだったのに、初めての出会ったテリーさんは棺の中だった。それが2000（平成12）年の12月でした。ですので、21世紀というのは不思議な時代なんだと思います。直接会ったことのない人のお葬式に行く、そういう時代なのかな、と。そんな不思議な経験をしたのが、19歳の頃でした。

私は、先ほども申し上げたとおり、物理を勉強するために物理学科に入学したのですが、テリーさんが亡くなったことを期に、この素晴らしいサイトがなくならないためには、テリーさんのホームページを引き継ぐためにはどうしたらいいのだろうと考え、インターネットの言語であるHTML¹²やCSS¹³などを勉強したりして、大学のパソコンルームに入り浸っていた19歳でした。

そして私は、テリーさんが作っていたポストペットのサイトやチャットのサイトの管理を引き継ぎ、更新等を続けていく中、徐々に小中学生の子どもたちが遊びに来るようになったのです。その子どもたちの書き込みを見ると、言葉遣いもマナーもできていない。「オッス」とか、「オレも混ぜろよ」といった具合で、私自身、大人の世代と小中学生の世代の会話がかみ合っていないということを感じていました。これはちょっとネットの使い方に関するマニュアルを作らなければいけないなと思いまして、22歳の時に作ったのがこの「ネチケットってな～に?!」というウェブサイトでした。インターネットのチャットを通じて、挨拶の仕方とか、あとはリテラシーというかマナーなどについて、どうすればにしたらいいのかというサイトがなかったので、それでは自分で作ってしまおうということで、小学生にも分かりやすいようにルビを振るなどして作りました。

そのサイトを作って半年くらい経った頃、とあるテレビ局から私のところへ電話がありました。皆さんも覚えていると思いますが、長崎で掲示板に悪口を書かれた女の子が同級生を殺してしまうという事件¹⁴が起こったんですね。それが2004（平成16）年のことだったのですが、インターネットの掲示板で何が起きているんだ、同級生から悪口を書かれて小学生が殺し合うというのは、一体どういうことなんだということで、「ネチケットってな～に?!」（現在のURL⇒ <http://cosmobox.jp/netiquette.htm>）の管理人である私のところに問い合わせてきたんですね。私は、そのサイトを作るに当たって、小学生でも読めるようにルビを振ったり、分かりやすい言葉を選びながら、優しい表現を心掛けていたのです。していたんですね。そのようなこともあってか、是非取材をさせてほしいということで、そのテレビ局から急遽取材を受けることになりました。

私は、幼少期から憧れていたテレビの世界の人たちと、突如間近に会うような状況になってしましまして、気分がとても高揚するとともに、自分が書いた文章に対して世の中の人々からこんなに反響があるということが、とても嬉しかったんですね。子どもの頃に自分がやりたかったのは、俳優や脚本家などの物作りでした。それが、22歳で自分が作ったサイトが、テレビ局からの取材を受けるというのは、とても不思議な感覚でした。その頃から、いろんな方からメールが来るようになりました。例えば恋人と別れたいがどうしたらいいとか、今いじめられているのだけれどどうしたらいいとか、様々な悩みの相談を受けるようになったんですね。

このようにいろいろな悩みの相談を受けるようになった時に、私が感じたのは、いろいろな人の話を聞くということがとても大事なんだと感じました。私は幼少期から「目指せ〇〇大学」といった形

12 Hyper Text Markup Language：Web ページを記述するためのマークアップ言語。文書の論理構造や表示の仕方などを記述することができる。

13 Cascading Style Sheets：ウェブページのスタイルを指定するための言語。

14 佐世保小6 女児同級生殺害事件：2004（平成16）年6月1日、長崎県佐世保市内の小学校で、6年生の女子児童が同級生の女児にカッターナイフで切り付けられ、死亡した事件。被害女児が加害女児の身体的特徴などをネット掲示板に書き込んだことが犯行の動機とされている。

で、勉強ばかりさせられてきた人生だったと思います。その中で、自分自身がやりたいことを見付け出せないまま過ごしていましたが、19歳の時にインターネットに出会って、テリーさんが亡くられて、22歳の時に自分が作ったホームページ「ネチケットってな～に?!」がヒットしました。そしていろいろな方がメールを送ってくださって、うれしい反面、その頃もインターネット上で誹謗中傷を受けたがどうすれば良いか、というような深刻な内容の相談メールももらっていました。

そのようなこともあり、私自身、これだけ人の話を聞くのであれば、カウンセラーになろうかと思い立ちました。もともと人の話を聞いたり、話をかみ砕いて分かりやすく伝えるということが子どもの頃から好きでしたので、カウンセラーを目指そうと考えたのですね。そこで、早稲田大学の臨床心理学部の授業を無理やり聴講して、カウンセラーの勉強をしていました。インターネット上で子ども同士が悪口を書き込みあって、殺人事件が起きてしまうような時代だからこそ、人の話に耳を傾けることや、その人の立場になって考える、感じるということが大切なのではないかと思い、22歳の私はカウンセラーを目指していたんですね。私自身が子どもの頃にいじめられていた経験を持っていたせいもあって、なおさら強くそう思ったのかもしれません。

先ほどもお話しましたが、私は東京大学を第一志望校として目指していたのですが、今振り返ってみると、なぜ東大に行くのか、目的は何なのかということについては、正直なところ余り考えていなかったと思います。それから、将来どんな仕事に就くかということを考えて時に、やはり身近な大人たちからの影響は大きかったと思います。私にとって身近な仕事ということで、まず小学校の先生、そして建築士である父親、そして予備校の物理の先生などがありました。私自身、人に何かを教えることが好きでしたので、予備校の先生になるとか、建築士の父をずっと見てきていたということもあり、なんとなく理系の仕事に就かなければということで、物理学科に進んだというのがあります。

そのような中で、私は、インターネットというのは、本当にいろいろな職種の方と出会えるなど感じていました。インターネットの世界を通じて、ライターやデザイナーの方々、建設業者、俳優、プログラマー、そして絵描きさんなど、それまでの18年間の私の人生、学校の中では出会うことがないような人たちとコミュニケーションを取ることができた。このことは、当時の自分にとっては大きな驚きでした。私は、仕事というものに対する関心は高かったのですが、何かを成し遂げるために東大に行くのではなく、東大に行くこと自体が目的になってしまっていた。「東大に入ること」＝「幸せ」なんだと漠然と思っていた。そして、私が19歳の頃にインターネットに出会って社会のいろいろな人たちとの接点を授かり、その人たちと会話ができた。世代や肩書き、社会的地位を超えて話をするができる場所というのは、とても貴重な場所だと思います。

私は、幼少期から人と接するのがすごく好きだったのですが、学校や家庭ではなじみず、引き籠もっていた自分にとって、チャットというのは本当に時間や場所を問わずに、いろんな人と出会うことができる大切な場所だと感じていました。そのような中で、私自身世の中に踏み出そうということで、カウンセラーを目指していたのです。

また、インターネットの世界ではオフ会というのがありまして、オンライン上ではなく、実際に顔と顔を合わせて集まるのですね。それまでチャットなどでやり取りをしていた人々とオフ会で会うと、ネット上ではかわいらしいアイコンを付けた人たちが、実際に会ってみると全然違う顔なんですよ。びっくりするわけです。ああこの人のハンドルネームはかわいいのに、こんなにごつい体しているんだなんて。このようにオフ会を楽しみながら外を出歩くようになったのですが、19歳の私は、その中で最年少の部類だったのですね。私の中学・高校時代は基本的に同じ年齢層の人としか会話ができなかったのに、チャットの人たちは30歳代や40歳代が多く、オフ会に行くと10～20歳も年齢差がある人たちといろいろな話ができる、とても楽しい空間でした。ずっといじめられていた私が、オフ会に出ることによって少しずつ社交的になっていった。ありのままの自分を受け入れてくれる存在がチャットの空間にいた、そのことが私にとっての大きな気付きでした。私の話を聞いてくれる人生の先輩方がたくさんいたということが、当時の私にとってはとてもうれしかったです。

こういった出会いをきっかけにして、少しずつ社交的になっていく中で、受験勉強以外に何かでき

るのではないかと、思って作ったのが絵本でした。渋谷で絵を売っていた露天商の方に話し掛けて、「あなたの描いた絵はとてもかわいらしくて素晴らしい。僕が詩を書くので、あなたの絵を使って絵本を作らせてほしい。僕は絵は描けないけれども、詩は書けます」としつこくお願いしました。その方は村田さんという方なのですが、プロの絵描きさんなんですね。ただ、いろんな経緯があってその時は渋谷で露天商をやられていたんです。村田さんは「僕は、これまでもそういう誘いは受けてきたんだけど、これまで余り関心はなかったんだよね。でも、古新君しつこいから僕の絵を使ってほしいよ。君がこれを商売抜きで自分自身の作品として持ち歩くのであれば僕自身の絵を貸してあげよう」ということで、絵をお借りして絵本を作ることになりました。

ちょうどその頃、高校時代の同窓会があって出席したんですね。これも社交的になったからこそ踏み出せた一歩だと思うんですけども、その同窓会で作った絵本を見せたところ、「実は俺は映画製作会社の社長をやっている、脚本家を探しているんだ」という同級生がいたんです。すごいなあ、まだ若いのに社長やっているんだと思いました。その時、僕は、絵本を作るように、言葉をつづることはできるけども、もっとやりたいことがあるんじゃないか、と考えたんですね。そして、映画の脚本を書いてみないかということで、その同級生に誘われたことをきっかけに、映画の業界に足を踏み入れ、下積みを始めたのが23の頃でした。

そのような経緯があって、私は映画業界に入り現在に至るのですが、今になって改めて思うのは、インターネットは現代の寺子屋なのではないかということです。インターネット上には、本当に様々な情報があふれています。まずはホームページに掲載された情報がある。そして、ブログによる情報発信が出てくる。更に時代が進むと、今度はFacebookやTwitterなどが出てきた。このように、どんどん情報を発信する手段も量もどんどん大きくなって行って、しかも通信速度もどんどん速くなっている。そこで私が感じるのは、旧来からある情報を発信するための媒体は、新聞やテレビ、ラジオといったマスメディアなどからのほぼ一方通行のものであった。ところが、IT（情報技術）の進歩に伴い、個人が、私たち一人一人が情報の発信者になることが可能な時代になっているのです。

そういう時代、世の中にあって、とても重要だなと思うのは、情報過多になっている今、相手の話に耳を傾け、その内容をかみ砕き、取捨選択などの適切な判断を行うことだと思います。その上で、情報を受信し、発信する必要があるんですね。これはネット上で互いに教え合いっこしている、とも言えます。そういう意味で、インターネットというのは、現代の寺子屋になり得るんじゃないかと思っています。

私自身Facebookがとても好きで、このトークショー（講演）が始まる前にも、これから登壇しますよ、といったことを書き込ませていただいています。自分の身の回りのことをリアルタイムで発信することができます。既に4名の方が「いいね」を押していただいています。このように、情報が拡散してリアクションが来るのが早いんですね。

余談になりますが、先ほども御紹介しましたが、私が最初に作ったホームページ「ネチケットってなに？！」を立ち上げたのが2004（平成16）年でした。今日のシンポジウムに御登壇されていた吉川誠司さんのWEB110（ウェブワンテン）の活動については、その当時から注目しておりまして、先ほど初めて直接お目に掛かれて嬉しかったです。

さて、インターネットが普及する前は、情報というのはたくさんあればあるほどうれしいものでした。情報の発信者がマスメディアなどに限られていたということもあります。それが、今では個人が発信者になることができるというお話をしました。FacebookやTwitter、そしてYouTube¹⁵などは、情報を発信するツールとしては非常に使いやすいです。これらの媒体を多くの人が利用して情報を発信し、ネット上に情報があふれかえっている中で、情報を絞り込んでいくというのは重要なキーワードになると思います。

あとは、教育というものを改めて振り返ると、私は答えの出し方も重要ではないかと考えています。

15 ユーチューブ：世界最大の動画共有サイト。

例えば、教室で先生が「 $1+1=2$ 」なんだよ、と教えますよね。先ほどのシンポジウムの中でもパネリストの一人が話されていたと思いますが、これからの時代は複数人でディスカッションを行い、一緒に考えていくことがとても大事ではないかと思います。これはインターネットを通じて様々な人々との交流を通じて感じたことでした。自分がいじめられて「お前はダメだ、お前は違う」と一方的に決めつけられて塞ぎ込んでいても、ネット上の人たちは話を聞いてくれる、尋ねてくれるんですね。この経験から、私はみんなで話し合っ、一緒に考えるというプロセスを大事にしています。

この共に考えるプロセスの大切さを理解するためには、子どもたちが複数人で話し合いながらホームページを作ったり、世の中の様々な疑問を学級新聞みたいなものを書いたり、映画などの映像を作る、といったことが効果的かもしれません。そのためには、先生や周囲の大人のサポートが必要だとは思いますが、子どもたち自身が主体となって、チームとなって社会の“なぜ？”を考えていく、その手助けをインターネットがしてくれるのではないかと考えています。

インターネットを介したコミュニケーションでは、文字情報はもちろんのこと、チャットなどでよく使われるアイコンや顔文字、最近ではLINEのスタンプなどが使われます。例えば、「ありがとう」と書き込んだとしても、その後になっこり笑った表情のアイコンが付いている場合と、怒った表情のアイコンの場合では全く違った意味合いとして受け止められ、大きな差がある。このように、文字だけでは表現し切れないものを、かわいらしいアイコンやスタンプ、顔文字などで感情まで伝えることができるというのは、すごく面白い表現方法だなと思いました。

私は映画の仕事をやるようになってから海外の友人ができました。そこで思ったのは、日本は良い面がたくさんあるのですが、コミュニケーションの部分では世間体やその場の空気を大事にする、気にしすぎる、とても特徴的な国なのかなと思っています。私がいじめられていたのも、学校や家庭という空気を大事にするあまり、そこになじむことができず、自分をうまく表現できなかったからではないかと思っています。

僕と同じように、日常生活の中で感情表現が苦手な子の場合、言葉をどういうふうに使ったらいいのかとか、いじめられちゃうんじゃないかと、結構戸惑うことが多いと思うんですね。そういう子どもたちが文字だけではなく、顔文字を使ったりLINEのスタンプなどを使ってコミュニケーションをすること。このように、あたかも右脳で会話をするのは、インターネットならではのコミュニケーションではないかなと思っています。

私は、これからは左脳¹⁶と右脳¹⁷の掛け算のバランスの時代ではないかと思っています。学校で勉強した後は、ホームページを作ったり、映画や映像を作ったり、言葉をつづるでも良いのですが、デザインをしていくという時代に入ってきたんじゃないかなと思っています。

あと、私がインターネットを通じて、「3つの『かん』」が大事なのではないかと感じています。私たちは何かを感じる時どうしても自分の主観から入ってしまいます。しかし、TwitterやFacebookなどを見ると、誰かが何かを発信しているという、まず「客観」から入るんですね。主観で俺はこうだ、私はこうだ、というのももちろんあります。でも、何がどのような状況になっているのか、何が起きているのかということを、客観で物事を見ることができるというのは、今とても大事なのではないかと感じています。

次に「中間」というのもキーワードではないかと思っています。何かを発信する時に、俺はこうだ、あなたはこうだ、だから違う、これだとかつて私がいじめられてきたように、なじめないものは排除してしまう、いじめられてしまう。白か黒かどちらかに分類しようとするんですね。でも、もしかしたら赤と青の間には紫があるように、中間があるんじゃないか。この中間をもっと考えていけるような環境というのがインターネットでもどんどん増えていくといいなと思います。インターネットには、誹謗中傷の書き込みなど、まだまだ問題点があると思いますが、良い部分もあります。しかし、どう

16 文字や言葉などの思考や論理をつかさどるといわれる。

17 視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚などの五感をつかさどるといわれる。

しても悪い部分ばかりが目立って多数派のような扱いになり、良い部分は少数派的な扱いになってしまうのです。でも、少数派の中にも尊重すべき価値はあるはずです。インターネットの良い部分と悪い部分の両方の面を見て、その中間を考えていくことが大事なのではないかと思います。

そして、3つ目が「共感」です。一緒に感じていくこと。私は、これからは共感の時代だと思っています。以前は、新聞やテレビ、ラジオ等による一方通行の情報がほとんどでしたので、この情報に始めるかそうでないかという選択肢しかありませんでした。ところが、ソーシャルメディアの発達により、かつてマスメディアでなければできなかった10万人への情報発信が、個人レベルで10万人に発信できるような時代になっています。この個人が発信する情報に共感していく、互いに感じていくということですね。インターネットは、先ほども申し上げた通り、顔が見えない媒体ですので、なかなか発信者のそして受信者の生身の感覚というのが理解し難いのかと思うのですが、私は逆に顔を見ないで感じていくという所にも、1つのキーワードがあるのではないかと考えています。

あと、先ほどのシンポジウムでもお話がありましたが、これからはネット世代の翻訳家を育てることが大事なのではないかと思っています。様々な情報が飛び交っている中で、言葉の意味であったり、マナー、セキュリティに関することなど、多くの分からないことがある。まずそれを一緒に考えていって、これはこういうことなんだよねっということで翻訳をしていく。恐らくこういう翻訳ができる人の数がまだ少ないと感じていますので、ネット世代の翻訳家を育てることが、これからより一層重要になってくるのではないかと考えています。

私自身、インターネットによって救われたのは、ネガティブだった自分、あとはだめだった自分がポジティブに生きられるようになったことです。

学校ではいじめられて泣きべそをかいていて、家に帰ると両親からは勉強しろと言われるばかりで、自分の居場所がなかった中で、唯一心のよりどころはテレビの中の俳優さんたちでした。でも、自分みたいに勉強ばかりやっている人間が芸能界の人たちなんて接点はないだろうと思っていたのが、自分が作ったホームページを通じてテレビ局からの取材を受けた。その後、映画の世界に足を踏み入れ、小さい頃からの憧れであった芸能界に身を置くこととなった。振り返ってみると、インターネットとの出会いが大きな転換点であった、インターネットが自分を受け入れてくれたことによってネガティブなダメな自分がポジティブに変わることができました。そのポジティブな発想が大事だったなと思います。

また、それと同時に、先ほど「中間」の話をしました。ネガティブとポジティブの中間を考えていくことがすごく大事なのではないかと思います。これを考える時に、例えばFacebookのように、シェアで“いいね”と言ってくれるというのは、とても大事だと思います。君はここが良いだとか、ここが駄目なんだではなくて、“いいね”って押ししてもらえただけでもホッとする瞬間があるのです。面と向かっていると、君いい表情だねとか、良いこと言っているねとは言いがたいですけども、Facebookで“いいね”って言ってくれるだけで、ああ僕が考えたことを周りの人が評価してくれたと思って、心がすごく安らくなっていくのを感じます。

では最後に、私の現在の活動を紹介させていただきます。来月劇場公開する「ノーヴォイス」という映画の話なのですが、日本では、年間17万頭もの犬や猫が殺処分されています。これは行政が悪いというふうに捉えがちな人も多いのですが、行政の方々も捨てられた犬や猫を殺したくはないんですね。問題は、犬や猫を物のような感覚で飼ってしまうこと、そして飼い方が分からなくて捨ててしまうことです。犬猫が捨てられる気持ちというのは、今回のようなテーマの長編映画の初監督作品として携わっていることは、とても感慨深いものがあるなと思っています。詳しくは、皆さんのお手元の資料に同封されているチラシを御覧ください。

また、現在私が取り組んでいることは、いろいろな所で、演技をしながら体験型のお芝居をしてみたり、映画の制作を体験してもらってコミュニケーションを培ってもらう、といったようなことにも取り組んでいます。そういった参加型の体験を通じて、人々が触れ合い、大人が無邪気に走り回ったりするようなワークショップをやらせていただいています。そこには、実は、Facebookの“いいね”

に通じるような笑顔のような、インターネット上で、チャットの中で知らず知らずの内にやっていたコミュニケーションの在り方が、今度はリアルな空間の中で展開されています。

そして、先ほども申し上げましたが、FacebookやTwitterを通じて全国の様々な人たちから連絡があって、福島県相馬市の「相馬野馬追」の映像化のお手伝いをしました。東日本大震災発生以降、開催が危ぶまれたこの行事を、映像の力で紡いでいって、あちこちに避難されている方々にDVDをお届けするという活動も、ボランティアとして携わらせていただきました。

それでは、最後に、私の初長編監督作品「ノーヴォイス」のできたてはやほやの予告編をお持ちしましたので、こちらを見ていただいて、最後の締めにつなげたいと思っております。

<映画「ノーヴォイス」予告編ビデオ上映> <http://no-voice.com>

来月（2013（平成25）年11月）キネカ大森、再来月（12月）にはオーディトリウム渋谷で劇場公開することになりました。

1時間という短い時間ではありましたが、私の半生をざっと振り返ってまいりまして、やはり私は教育が重要なのではないかと考えています。私は子どもの頃から勉強は好きでした。ただ何か違うんじゃないかと感じ続けてきました。大学で物理学科に進んだのは、通っていた大手予備校の先生になりたいという思いからでした。その後、カウンセラーを目指し、いろいろなことがあって絵本を書いて、そして今は映画の業界に来て、監督になった。本当に人生って不思議だなと思います。19歳の頃の私が、引き籠もりから世の中に踏み出すきっかけとなるチャットを作ってくれたテリーさんに心から感謝をしながら、私が多くの人々に伝えてきたいのは、子どもたちが生き生きと笑顔でポジティブにすることができる社会を、というところですね。

インターネットというものは、リテラシーやセキュリティの面では、有識者、専門家の方々が中心となってしっかりと構築しなければならないことが、まだまだあると思います。しかし、私のように人生が閉じられた空間からオープンなものに変わった、ネガティブからポジティブに大きく変わることができるきっかけとなったインターネットにはとても大きな可能性があります。インターネットは、人類の数千年という歴史の中では10～20年程しかない浅い浅い歴史です。ですので、まだまだ確立していないこともたくさんあるわけですし、インターネットが一つの要因となって殺人事件までも起きってしまうような本当に怖い時代であるからこそ、逆にインターネットをポジティブな側面からどのように使っていけば良いのかということを積極的に考えて、それを子どもたちに伝えていきたいと思っています。

僕のように人生だめだな、第一志望の大学に落ちちゃって苦しいな、自殺してしまおうかなと思った時に救ってくれたインターネット。こういうふうに自分自身の可能性を受け入れてくれる場所としてのインターネット、そして自分がやりたいことへ一歩踏み出すきっかけとなったインターネット上での人々との出会い。大きな可能性を与えてくれたインターネットに本当に感謝しています。

あっという間の1時間でしたが、本日は御清聴ありがとうございました。

*このトークショーの様子は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

<https://www.youtube.com/jinkenchannel>

●関連情報

*コスモボックス株式会社 <http://cosmobox.jp/>

*ひきこもり卒・映画監督ブログ <http://coneyshun.blogspot.jp/>

*古新舜 ツイッター <https://twitter.com/coneyshun>

*映画「ノー・ヴォイス」フェイスブック <https://ja-jp.facebook.com/novoice.movie>